

五条川堤の桜と尾北自然遊歩道

大口町地内

桜の名所

五条川堤

大口町を南北に流れる五条川は町内約七・二キロメートルの桜と尾北に及び、この堤防上の桜は三〇〇〇余本といわれ、この地

自然遊歩道

方一の桜花の名所となっている。

ソメイ吉野桜の並木は樹齡二〇数年をかぞえ、枝葉は旺盛となり、見事な花を咲かせる。

片側の堤防は、尾北自然遊歩道として完備され、春、秋の季節には町民はもとより、近郷の人々の花見、散策の場所としてにぎわっている。

なおこの川は昔から「幼川（雅川）」ともよばれ、昭和二八年に町内区域の改修工事が完工している。

第三節 古 文 書

豊かな自然や貴重な文化が高度経済成長の波にのまれて、多くが消失しようとしている今日、ふる里の歴史を見直し、これを保護しようとする力が大きく広がっている。

つきにかかげる古文書は、こうしたふる里の歴史発掘の参考資料として活用され、今後一層の考證がなされようと

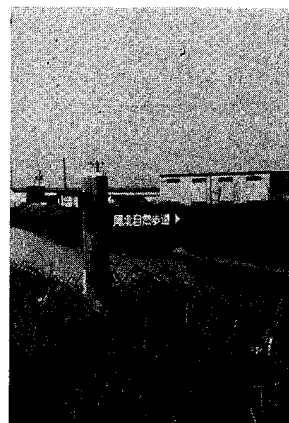


図4-41 五条川と尾北自然歩道

している。

「系図」、織田後代記目録其他調書 酒井史郎宅(下小口)に多くの古文書が保存されているが、この中に見出しの古文書がある。

この中で「大久地城家中調」の項は、城がその勢力を誇った頃の家臣の持高、地位、その家臣の江戸期における未孫の氏名などがこまかく記載され、その偉容とそして戦国興亡の波の中に、廢城となり家臣がそれぞれ諸国に流れていく中で、多くはこの地にとどまり現在の大口町民の祖先となっていることが容易に考察できる。

その他、下小口地内に祀られていた愛宕大権現、白山大権現の由来もみえる。

大久地城史記
大久地城史記なる古文書(写本)が町内に現存するが、これには築城の経緯、歴代城主の保城史記、織田氏の系譜がこまかく記述され、城の栄枯盛衰もこまかく記述されているが、その史料価値については、今後の研究を待たねばならない。

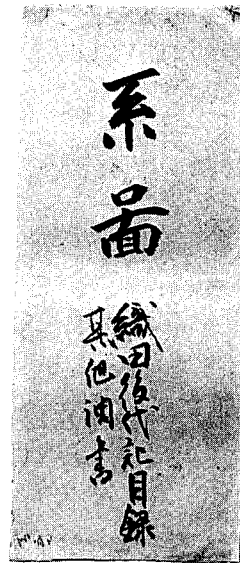


図4-43 「系図」織田後代記目録(酒井史郎氏蔵)

第五章 人物

郷土大口の發展につくした人、またそれぞれの分野において顕著な業績をあげ、本町の誇りとなる人は多くある。そのうち、この地に住み、また、多くの人々の記憶にのこる人物と遺業のあらましをしるす。

なお現存の人々については、この編ではとりあげないこととした。

織田 広 近	堀 尾 吉 晴	仙 田 半 耕
酒 井 椿 溪	花 橋 春 溪	田 山 地 久 七
酒 井 覚 朗	丹 羽 伊 三 郎	野 田 正 昇
杜本仁左工門	赤 堀 禪 稻	

織田 広 近 幼名を与十郎郷近といい、織田郷広の子、岩倉城主敏広の弟で、天正の乱において武功を樹てる前、長

禄三年(一四五九)に丹羽郡小口村みぐち(現在の大口町小口)に築城をはじめ、翌寛正元年に入城し、この城を箭筈城と名づけた。城郭を整えて尾張北部の守りを固めるとともに、美濃より尾張への勢力侵攻にそなえ、この勢いが激しくなるにつれ、尾張、美濃の国境である犬山郷木ノ下村(現在の犬山市木の下)に城を構え、これに對した。(築城は文明元年(一四六九)といわれている。)

こうして広近は近郷においてその力を發揮したのち、臨濟宗の高僧悟溪禪師を招いて城下(現在の余野地内)に徳林寺を創建し、その後城郭の近くに万好軒と称する隠邸をたてて、余生を送ったと伝えられている。